

昭和九年五月十一日 第三種郵便物認可
昭和二十年一月二十五日印刷納本 昭和二十年二月一日發行
(毎月一回一日發行)

大倉邦彦監修

躬行

皇紀二六〇五年
二月二號
通卷第一三三號

三箇の信條

- 一、皇國精神を深める事
 - 二、世の爲め家の爲めに盡す事
 - 三、眞心を以て物事を判斷する事
- ### 五箇の實踐
- 一、朝早く起きて神佛を拜む事
 - 二、物を大切にし食物は頂いて食べる事
 - 三、勤勞を喜び人の嫌ふ仕事は先に立つて行ふ事
 - 四、禮節と規律とを守る事
 - 五、自分の事は自分でする事

思想國防

どんな理由があらうとも負けられない戦争である。
無理な様だが戦争の勝利は無理を突破し得る方にあ
る。

平常時の法律規則を、既設團體の慣習に一度目をつ
ぶつて、戦争必勝を法源とし、團體を更生せしめるこ
とを急務とする。

負けはしないだらうは必勝の信念ではない。人生涯
を戦争に投げ込む覺悟から眞の必勝の信念は湧いて來
る。

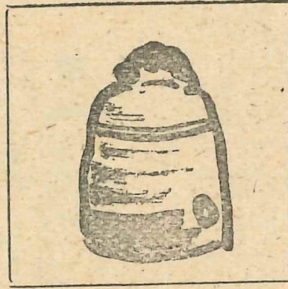
明治天皇御製

劍

あらはさむときはきにけりますらをがときし劍の清き光を

腹を据ゑて構へよ
(一)

(本稿は昭和十九年十二月十六日
大倉先生が放送されたものであります)



幕末の頃、土佐藩の江戸屋敷に、茶坊主何某といふ者が居りましたが、心懸けがいいといふので、侍に取り立てられて、初めて大小を腰にさすことになりました、或る晩、和田倉門を通つてゐると、フト一人の侍に出會ひました。その侍がいふのに、「自分は所願があつて、幾十人に眞劍勝負をやつて來たが氣の毒だが、お前も一つ勝負の相手になつて呉れまいか」と。實は茶坊主上りの急仕立の侍で劍道も知らないし、一應當惑したが、大小指した手前度胸を決めて、「では相手にならう」と返事はしたものの、自信もなかつたので、考へた結果、「では暫く待つて貰ひたい。主人の用を済ませたら、こゝにやつて來て勝負を決しよう。決して逃げ隠れはしない」といつて、一應そこで別れました。しかし何とも不安で堪まらないから、早速その足で劍道の達人千葉周作の門をたゞいて、「かくかくかやうの次第で仕合を申込まれた。どうせ死ぬる覺悟はして居ります。併し未練な死に方をしては主命を耻めるから、見苦しくない死に方をする方法を教へて下さいと頼み込みました。ところが千葉先生は、珍らしい變り者が來たと思つて、「それだけ肚が決つて居れば、よし教

へてやらう、唯今の話を聞けば、敵は頗る手の冴えた武士と思はれる。少々の稽古をしたところで到底業で勝つ見込はない。況んや今すぐ役に立てようといふのでは、到底勝てないだらう。然しお前さんがずぶの素人だから却てそれがいい。ではよく聞いて置け。その侍と相對して双方互に一刀を抜いたらば、お前は左足を一步踏み出して力を込めて大上段に振り翳して、眼をつぶつてしまへ。どんな事があつても眼を開けてはならん。するとやや暫くして、腕か頭かにひやりと感ずる事があるだらう。それは斬られたしるしだ。そのとたんにお前も力にまかせて上段から斬り下ろせ。さうすればお前のやうな素人でも相打ちになつて敵も屹度傷くにきまつてゐる。」かう教へられました。茶坊主先生喜んで、一大決心を持つて、さきの和田倉門に歸つて來ると、先の武士は悠然として待つてゐたのであります。互に挨拶を交はして、一刀の鞘を拂つた。茶坊主先生は、魂を丹田に收めて、眼をつぶつて大上段に構へて身動きもしなかつたのです。向ふの侍は、やゝ離れてかけ聲をかけても、こちらは瞑目して唯だ石地藏のやうに立つて居りました。そして心中今か今かと斬つて來るのを待つたけれども、ちつとも斬つて來ない。これは不思議だなと思ふ間に敵は、「恐れ入りました」といふから、目を開けてみると、向ふの侍は刀を投げ出して、大地に頭を下げて居りました。これは不思議だ、何の事だらうと思つて茫然として居りますと相手の侍は、「恐れ入りました立派な御手並で、私の及ぶところではない。」といつて茶坊主に降服したさうであります。

この話は少々突飛のやうでありますけれども、大いに教へられるところがあります。びくびくしないで吐さへきまれば、死地をさへ突破することが出來て却つて相手を殫すほどの神業が出て來るものと見えます。神風特攻隊の必死必中もこのことであらうと思ひます。私共の職域の上にも、戦時生活の上にも同様の結果が生れて來ないといふことは決してないと思ひます。

今日私共國民はこの大戦争を勝ち貫くために、未だ會つて經驗しなかつた仕事に當つて居ります。そこには自然、不慣れから來る不安もあり手違もあり、躊躇してみたり尻込みしたり、困難から逃げようとしたりするともあつたに違ひありません。これは誰れでもさういふことがあり得ると考へられます。

それから又最近のやうに、毎日毎晩、敵機の來襲を受けると、つい氣の弱い人はおびえてしまつたり、そのおびえが人に移つたりしてびくびくするやうでは、敵の計畫通り神經戰の思ふ壺にはまつてしまひます。そこは肚を決めて「よし來た、さあ來い」といふ態度で、決心をすれば、慌てることもなしに立派な構へが出来ると思ひます。空襲の際聞くとともに、荷物ばかり氣にして運び出して、家を空にして逃げ出したり、防空壕から仲々出て來なかつたため、類焼の原因になつたことさへあつたさうであります。肚が出来れば自然氣轉も利くやうになり災害も防止されませう。

抑も自分のことに把はれ、自分の都合をのみ考へてやつたことは、結局は萬全の策ではないと思ひます。私共弱いものでも、日本に生え抜きの日本人として、み民われの立場に立てば、腹もすはり窮屈な生活にも甘んずることが出来るし、敵の目指す神經戰にも、怯えるどころか益々敵を呑む氣魄が昂揚するものと信じます。

更に又、指導者側に立つ者の指導振り如何によつても、國民に力を與へたり、國民の氣を弱くしたりすることもあり得るのであります。

(以下次號)

職域特攻魂

お嫁さんは「私が悪う御座いました」と謝る。主人は「いや私の注意が足りなかつたのだ」と云ふ。姑が「いや／＼それは私がうっかりしてゐたからです」と回逃し合ふ家庭は風波が絶えず、一致協力の強みが出て來ないで、次第に衰運に破れたことについても、銘々が自分の足赴く他はない。

これは唯一の必勝の要諦だ」と云つて居るならば、製品末納の重大な問題は永久に解決されない。

全國民が體當りで戦はねばならぬ決戦の時に、このやうな責任免れの卑怯な逃げ腰で、どうして國體を護ることが出来るやう。「お前が悪いからだ」「彼奴がいけないのだ」と逃げ口上を述べてゐる内に敵は目の前に迫つて來るではないか。「航空機を！一機でも多く、一刻も早く！」

と云ふ前線からの悲壯な叫びに應へて、神こそ自分の仕事の全責任を負ふ立派な態度を生むのである。

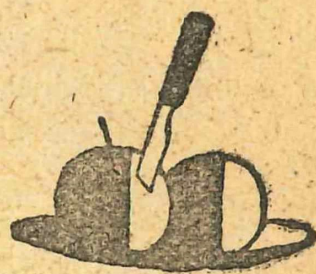
航空兵器總局長官が、「總力結集といひ大和一致といひ、それはそれ／＼の司、司を信頼して、他人の職域には口を出さな、餘計なお世話かいもせん、その代り自分の職域は全責任を以て完遂するといふことだ」「飛行機のことはこの遠藤に委せて、自分の仕事に精根を打ちこむことだ……軍も官も民もない、お互が信頼し合つて、各自の職域に専念すること、の責務を貫徹すべし」

自分なかつた點を感じて、それ／＼責任を負ふ家庭は常に圓滿で、家運も伸び榮えて行く。それと反對に「お前がぼんやりしてゐるからだ」と若い嫁を責め、「あなたが氣をつけて下ればよかつたのに」と嫁が答へると云つたやうな、互に責任を回逃し合ふ家庭は風波が絶えず、一致協力の強みが出て來ないで、次第に衰運に破れたことについても、銘々が自分の足赴く他はない。

りなかつた點を感じて、それ／＼責任を負ふ家庭は常に圓滿で、家運も伸び榮えて行く。それと反對に「お前がぼんやりしてゐるからだ」と若い嫁を責め、「あなたが氣をつけて下ればよかつたのに」と嫁が答へると云つたやうな、互に責任を回逃し合ふ家庭は風波が絶えず、一致協力の強みが出て來ないで、次第に衰運に破れたことについても、銘々が自分の足赴く他はない。

自分なかつた點を感じて、それ／＼責任を負ふ家庭は常に圓滿で、家運も伸び榮えて行く。それと反對に「お前がぼんやりしてゐるからだ」と若い嫁を責め、「あなたが氣をつけて下ればよかつたのに」と嫁が答へると云つたやうな、互に責任を回逃し合ふ家庭は風波が絶えず、一致協力の強みが出て來ないで、次第に衰運に破れたことについても、銘々が自分の足赴く他はない。

知足と不知足



本年は元旦早々帝都に敵機が空襲して来た。それ以来殆んど毎日のやうにマリアナ基地あから本土に來襲をついてゐる。マリアナは我が領土ではないか。帝都が敵の兵火にかゝつたことは肇國以來未曾有の國辱である。一億國民まさに憤激蹶起せねばならぬ時である。

飛行機の不足のために敵撃滅の妙機か可惜逸せられた事が屢々あつて、前線の將兵をして齒がみをして悔しがらせたばかりではなく、大部隊玉碎の犠牲をも佛はねばならぬことになつたことは誠に悲しむべきことである。飛行機増産の聲は開戦以來の掛聲である、而して戦争が段々苛烈になつたといはれるのは、敵米が大量生産に物をいはして強引に反撃に出て來た結果である。暴戾なる敵機は遂に去月十四日一億國民崇敬の中心たる山田の神宮神域に投彈するに至つた。何たる暴慢無禮であらう。一億國民は更に憤激を新にし且つ反省せねばならぬ。

さて飛行機が足らぬ、彈丸が足らぬ、補給が續かぬ、足らぬ、足らぬといふてゐたのでは、戦争は出來ぬ。陛下の御信倚に報い奉る忠誠勇武な前線の皇軍將兵は、あらゆる欠乏に耐へ、困苦を忍んで、日夜驕敵に對抗してゐる。此の時世界

の耳目を驚かした海軍の神風隊や陸軍の萬眾隊の必死必中の戦法は、飛行機の不足を補つてその足らざるを足らせた戦法である。足るを知るの戦法である。物量を越えた精神力の發路である。この思ひ切つた體當りの戦法は、海行かば、山行かばと、祖先傳來の忠誠心を以て、現御神とまします大君に身命を捧げ奉つた皇軍將兵にして始めて發明の出來たものである。生きた爆彈となつて、大きな獲物を選んで命中炸裂しようといふ悲壯とも悽絶とも形容の出來ない攻撃精神の現はれである。

與へられた飛行機が善からうが、惡からうが、それは神鷲の問題とする所ではない。その點足るを知るものといふべきであるが、神鷲達は必死の覺悟だけでは満足してゐられなかつた。必中の苦心があつた。操縦技術の修練を必要とせられた。必死となつてはならぬ。必死の覺悟はあつても死處を得ることは難しとせられた。出撃命令の下る道は猛練習が行はれたといふことである。百發百中の自信は足らざるを知つての猛練習から生れたからである。自信が出來て沈着が生ずる、平靜が生れる。神鷲達が出撃の際、部隊長や僚友達に最後の決別をして、演習に出るよりも氣輕に、ニッコリ微笑をたたへてゝでは征つて來ますと朗かに飛び立たれたと承る。誠に神々しい態度である。

今次の戦争は皇國の存立を脅かす敵米英に對する自衛のためのみではない。共榮圈内各國民の獨立を完遂せしめるため

の戦である。前途は遠遠である。特別隊神鷲達の忠誠武勇の精神は一億同胞の齊しく祖先より繼承せるところで、畏くも上御一人の夙に御信倚あらせたまふところである。今日此の時、銃後に於ける官民一同總力を擧げて、皇軍將兵の躰當り敢闘戦法に倣つて各職域に於ける御奉公に邁進し、驕敵の膺懲撃滅を更めて誓はねばならぬ。同時に各自がその忠誠心に不足がありはせぬかと、日毎日毎に反省して戦々競々自肅を心がけねばならぬ。

大化改新の詔に、先づ當さに己を正しくして後に他を正せ、如し自ら正しからずば何ぞ能く人を正さむとある。兎角他人の過失は目に着き易い、自分の責任を他人に轉嫁して我れ關せずと清しい顔をしてゐる者が世間に多い。人がするから自分もせねばとて悪いとは知りつゝ雷同する者もあり、又上の者が悪いことをしてゐるのを見て、之を正さずして反つて共に己が利を求めるなど、人慾は次から次へと際限がない。これは米英個人主義利己主義自由主義の短所である。

こゝに足るを知るといふ反省が必要となる。これは單に消極的禁慾的であつてはならぬ。物質的に不足な物を精神的に補充するといふこともあつて然るべく、地方的に不足する物代用品をによつて填補せんとする考案工夫もあつて然るべきことである。そのやうな補充填補の工夫や考案が足らちといふことがありはせぬかと反省することが即ち知足と知不足との歸一する所以である。足らざるを知るといふは他を羨望

し、猜疑嫉妬するやうな心構へをいふので無く、奉公の誠を盡くす事に於て他より劣るところがあつてはならぬ、いや他人を規準にして競争する意味でなく、盡くすだけ力を盡して尚ほ足らざるを知ることはいふのである。職務の務の字は古訓はマツリゴトと讀まれた。天皇の大權を御預かり申してツカヘマツルコトをいふマツリゴトなのである。農民の土地改良も食糧増産も供出も、工場の經營も勤勞も、生産も、すべてがマツリゴトである。

戦争完遂の大御業に關係せぬものは今日の場合何一つとしてある筈はない。配給が足らぬとか、モット戦況の實際を知らせて貰ひたいとか、交通の制限が緩和されたいとか、足るを知つて忍ぶべきことを忍ばないで、自分の、爲すべきこと、盡くすべきことの足らざるを棚に擧げて置くやうなことがあつてはならぬ。

親は自分で食はなくても子供を飢ゑさせまいと思ひ、子は親に厚着をさせ、自分は薄着をする。自分がはたらいて少しでも親に樂をさせたいのが、親子の情である。これを他人に及ぼして、自分は足るを知り、他人の足らざるを知つて、自分の分までを分け與へようとする。これが八紘一字の家族國家の情義であつて、肇國以來、惟神の皇道精神であり、戦時體制下に發露して、増産、供出の一樣相となる。亦正に大東亞建設の基本型でもある。

今に見ろ！

敵將ニミッツは「日本を撃滅するには、その武力や政治を破壊するだけでは足りない。その自負する神國觀念とその信仰とを破砕しなければならぬ」といふことを放言した。この不可能事を實現するためには彼が如何なる手を用ゐて來るかを深い關心を持つて覽てゐたのであるが、果せる哉、敵は一月十四日午後、遂に伊勢の外宮を爆撃するの暴舉を敢てしたのである。吾等は 將に怨髮天を衝き、この頑冥なる米國をこそ地上より抹殺せざるば止まざるの憤激を覺ゆるものであるが、同時に彼等の思想が如何に單純にして愚劣なるものであつたかを、この一事によつて端的に知ることが出來た。

本來米國人にして文化を説く資格を有するものは殆んどゐない。彼等は物の世界の理解しか出來ない極めて低級なる思想の持主である。率直に言へば馬鹿である。この馬鹿の馬鹿力を相手に今吾等は戦つてゐるのである。それ丈けに彼等の

どんな事をやり出すか判らない。又その意味に於て油斷の出來ない、少くとも日本人の常識では判斷の出來ない恐るべき相手である。勿論、この種の低級なる思想の持主にも信仰はある。それは原始的なユダヤ教的他力信仰である。他力信仰は強ければ強い程 神の全智全能に頼ることになる。彼等はこの程度の思想を以て 日本人の神國觀念や信仰を理解してゐるのである。「全智全能の神の國には敵機は入れない、全智全能の神域には爆弾は當らない」と日本人は信じてゐる。従つて日本本土や神域を爆撃すれば 日本人の信仰は吹飛んでしまふと考へてゐるのだ。笑ふべき單純な考へ方である。

恐多くも 天照大神は 天皇に御出現遊ばされ、その御分身は、日本人の各家庭の祭壇に、更に一億日本人の心座に分配されてゐるのである。皇統連綿たる限

り、神國日本は滅亡せず、日本人一人たりとも生き残りてあらば、その信仰は消滅しないのである。日本人の信仰は彼等の信仰の如く、形式的な、觀念的な、死

せる信仰ではなく、實存的な、具體的な、生ける信仰である。恐らく、吾等が神皇信奉といふところのものは、彼等には理解出來ないであらう。敵弾が我が本土特に神域に落下した事は、誠に憤激の至りであるが、そのために、吾等の信仰は微動だもするものではなく、寧ろ 神皇信奉の一念は益昂揚する計りである。今に見ろ、日本人の一人一人が神風となり、神火と燃えて 米國をこの地上より吹き拂ひ焼き拂ふ日が來るのだ。

昭和二十年一月廿五日 印刷
昭和二十年二月一日 發行

定價送料共 一部金五錢
一ケ年分 金七十錢
(誌代六十錢 振替料十錢)

編輯兼 發行所 山 田 勝 二
東京都蒲田區仲六郷一ノ五
三省堂蒲田工場
代表者 中井清太郎
(東京二三九)

印刷者 山 田 勝 二
東京都蒲田區仲六郷一ノ五
三省堂蒲田工場
代表者 中井清太郎
(東京二三九)

發行所

横濱市港北區太尾町大倉山
電話横濱編島五〇番
振替口座横濱四六〇一六番
登錄番號 第二〇七〇一六番

日本出版會會員 登錄番號 第二〇七〇一六番

昭和九年五月十一日 第三種郵便物認可

(毎月一回一日發行)

躬行

第一三三

定價

(送料共) 金五錢

昭和二十年一月二十五日印刷納本 和二十年二月一日發行